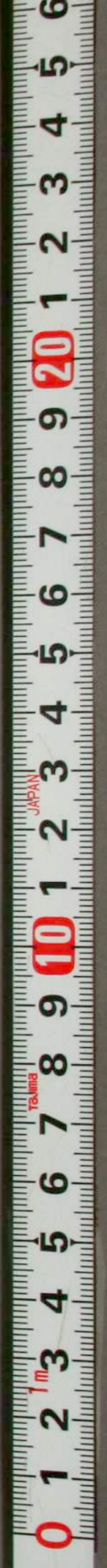


畫像
十二

身
體
筆
子
紙

三

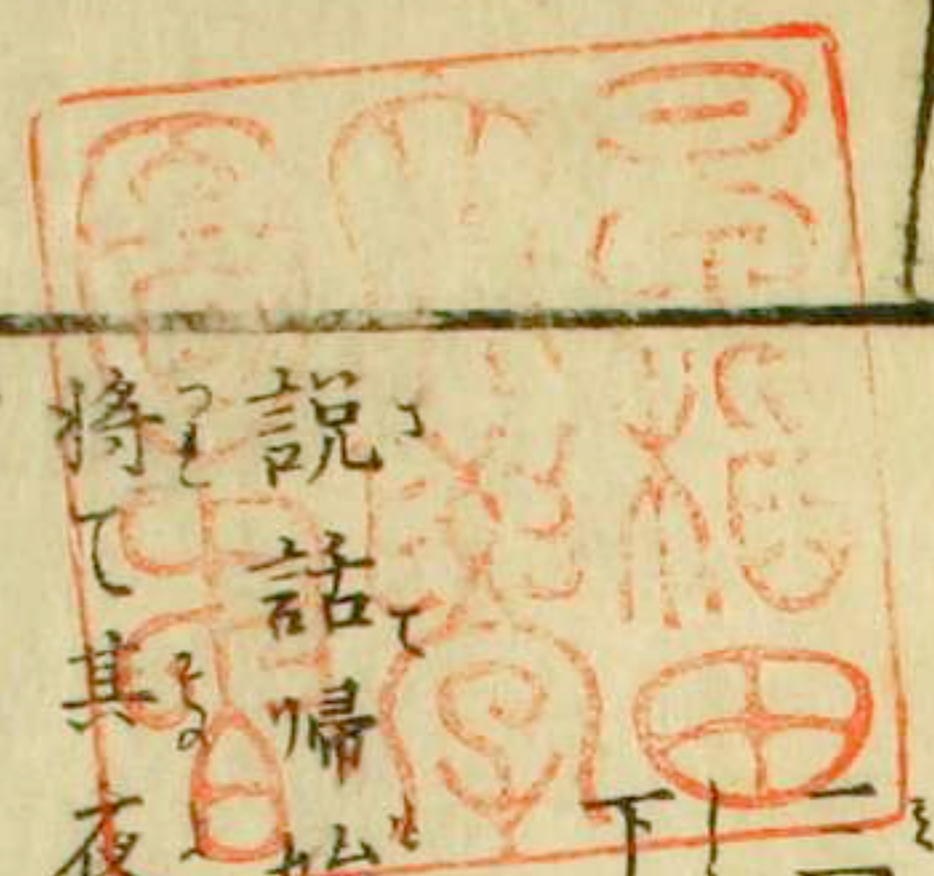
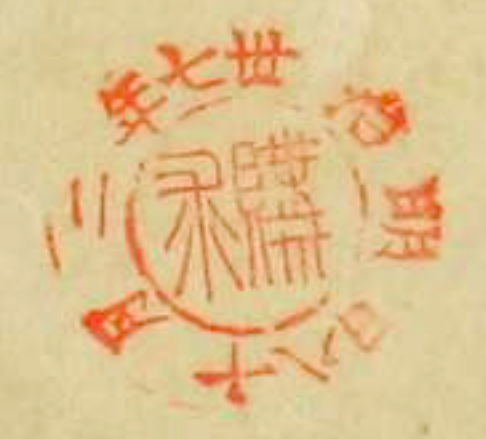
49
へ遠13
968
3.



繪本蕒草紙卷之三

玉泉堂膽丸戯編

二國峠節女遇難
下之関孝子詫債



說話始井関の側女沖津ハ浦太良と懐に一老人晋七を
將て其夜屋舗と忍出生國るれハ先城刃乙訓郡山崎ハ心ば
足一任せて歩行ハ三國峠ハ一ハ此三國峠ハ一ハ攝津橋
磨丹波三國の分道にして昼ハ往來多一と一ハ夜ハ行人詰
して良もこれハ強盗人とかや中一ハ夜ハ人皆怖て夜行を
然る沖津ハ此所迄たより來ぬと夜中といハ元より案内ハ知

門遠3
號968
卷3

本清

繪本蕒草紙卷之三

どにあらも雨さそが降て忽ち前後路と失ひ漸出る灯と目當
りして一軒の藁家たどり扉とおしるひ案内知ざる夜乃旅女の
歩勞をいみぢるを暫し休息させ玉りまかると言入るり唯と答
る此家の主此世と十余り生過せしと見へ一姫の白髪を黒さ
油して色付顔の際圓小鍋炭りて血と鼻骨尖りて宿痛比如く
落残了る矢の根乃如死齒り鉄漿黒くと凍るり睡落るる
たる大の眼と細目して立出つ若さ女の殊り小鬼と抱さむら
夜中に山路と越玉ふハ等閑の用事にくいも有やト先ころを
よへ入て休ひりくとして兩人と伴ひ入る沖津晋七も大に悦び
蓮の床に腰打ち暫し息とど継居り老嫗ハ沖津とけりく
見くとも何更の有て夜中に何方へ越玉ふやと問り沖津答て

妻一大事の用有て播磨より城砦山崎へ趣く者あて侍せどある
ぬ山路より行かやとて侍るるれ去かかろむいとも今夜の中此山と
く度存しいるるる最早退出いんと立上るに老嫗のく左程
急の様るれ止りとも止る玉り此山中ハ鹿猿の多くなりハ灯
なきてハ危くゆり是りて行かして提灯中此物の苗小塗る怪け
るるに蠟燭取と差出ると辱れ由と謝り晋七ハ是と燈し先
立と歩行り老嫗ハ道筋と委しくおし暫し門辺に見送て内に入
る沖津ハ晋七の後付て一里余りも歩り頃一藪に松此中より
忽ち種々鳴の音と響て先し進り晋七がむらりと打被るる
何よりつてくも横さぬに倒ると沖津ハ大に驚つてハ何更と
と周章ふらめれた介抱とるに晋七苦さ息とつた是全く盗賊の所

會本集卷之六

為と覺てり今一是一來る僕ハ斯渾手と履ゆるを
所全助る命かり君ハ早く身と忍て急難と免を玉われ
去ても折角御供召せりつに心ざん方へも贈る居る此
所あて命と果し事口惜し又言甲斐う思はんれども
言て返らば見付らぬ其内ハ早く御身と忍ゆる
急を以沖津ハ左右回答さ泣より外の夏ぞる早人の近づく声
聞に晋七ハ只顧り此場と早く遁を玉われと諫急を以沖津
ハ心ハ爰に残も思案と極め傍と尋漸と土橋の下身と忍びぬ
程う兩人の溢者大縄う立出来りつ晋七が袷取取て引おじ
やと老徐一人のひりり瓜連の者ハ何方へ忍むつ
とく言へし晋七ハ苦しなる瓜連の者として有るや急

用有て夜陰の旅金銀と持祓はとれると思つにた得物も
有やと思ひむご働ハ徐等が不運と我命と断て徐等が思出り
せよと眼と閉り観念するに盗賊ども不審一這廁一人の樋の口邊
の合印乃丁らんと与ん中か外に連のうてやハさ見よとて
樹木の間山ハ凸凹隈に迫普くさるに更り人影と見
されバ今ハ詮方かして先晋七が衣類大小と引取只一人の老小
言まざる骨折るどは中火繩と煙草吹付てまゝに休息し
折り蕨馬の嘶く声して馬士と思はれ黄カカ声し
あも志まぬ唱哥と諷ひりて登り来る有様一彼賊兩人ハ壁に
木蔭し身と忍ぶり駄荷付し瘦馬一人乃侍横柄打時
が馬士小口ととせら頻て其所に近附此沖津ハとと居



忙しく走り寄て馬前よりむき伏おそり言さるる殿の何方へ
 越せられりハ存せられり御侍と見請奉り御願ひ申す
 こそ妻急の用れりひて夜中此山路より差かりゆひつり
 山賊乃所為とて一人召連し奴僕と飛道具もく打課し猶
 妻と尋ると此所より身成忍びて辛うしてたぬがれ侍願ひ
 殿の仁恵とて家行く方迄おくり下されるハ生るの御恩小侍
 されと泪と共に願わに彼士急を馬よりおろし立その危を難
 けい平よりあか死果し奴僕へせん先其許の恙るれこそ重
 畳るれ定る勞も仕玉んていご此馬より乗りて家行く方
 送奉らんとてとて叮呼に爵待馬士も共に信だつて沖津と馬
 抱兼ると其終細引とりて沖津とつりめ鞍はがにあらと

結付口より猿書と合すせ小児ハ死骸の傍るげやつこら
 人々とも出て娟妍と見ゆると言ふ以前の両賊木蔭より立
 つて宵に結し燈花乃報の早速眼に見る夏ハ斯の如き婢妍
 女と無疵と取得る賊主の謀畧早く歸りて褒美の酒小預んと
 勇進んが引立行沖津ハ案に早速して虎乃口と遁り毒蛇の
 潭に落入思ひ叫ぶんとされども声なきに出移り悲歎の泪衣と
 びり山奥さして引ま行ぬ春の夜乃短くを程おく東雲明
 渡り時放き諸鳥乃遠近り轉り里も程遠くはと知
 せし鶏乃声なりすく鳴り了頃一人の獵人來りて思ひ
 も死骸の傍り小児の泣体と見ると大に驚死こた正しく
 盗賊の所為なりんとてもに小児も殺を方とて勝らん小

整^{ととの}り助置^{たすけおき}しこそ不便^{ふびん}なれとて立寄^{たちよ}て抱上^{かか}ハわけあぐりも
赤^{あか}ど乳房^{ちちのう}放^{はな}まぬ孩児^{こども}かれを我手^{わがて}しそ育^{そだ}てん中^{なか}うれさる
ハとして打捨^{うちすて}置^おんも本意^{ほんい}なるべ免^とせん角^{かく}せぬとほをそ折^おし
もと見^みまぶつるさつら山端^{やまのへ}に五十^{ごじゅう}有余^{ゆうよ}の農夫^{のうふう}と見^みし赤裸^{あかむだ}
あて西^{にし}に向^{むか}ひ手^てと合^あせて既^{すで}に身^みと投^なげん光景^{ひかりげ}なる狐獵^{きつり}人^{ひと}忙^{いそ}しく
言^{こと}とけ喘^{あせ}き駐寄^{ちよき}つ彼所^{かのところ}より伺^{うかが}ふ捨身^{すてみ}の体^{てい}と見てはにとも何^{なに}
等^ら此^{こゝ}憂^{うれ}有^あて斯^{かく}老人^{らうじん}の思^{おも}ひ立^た平^{へい}中^{ちゆう}縁故^{えんこ}と明^あし玉^{たま}り事^{こと}にうてハ
力^{ちから}とも成^なてん物^{もの}とて言^{こと}し老人^{らうじん}少^{すく}し耻^はじらひするおそくちあて御尊^{ごそん}志^し
の言^{こと}りごとくがく耻^はじとつまは物^{もの}詰^つまへ某^{また}元^{もと}ハ城^{しろ}加^か山^{さん}崎^{さき}の住^{すま}人^{ひと}
高濱^{たかひら}松^{まつ}太夫^{たうふう}と者^{もの}より姉^{あね}妹^{いもうと}の子^こと持^もてはが姉^{あね}ハ先^{まづ}年^{とし}播^は加^かの
家^{いへ}士^しハ不通^{ふつう}り遣^{つか}り其^{その}後^{のち}年^{とし}乃^{すなは}ち不^ふ作^さみく大^{おほ}り困^こ窮^{きゆう}し

既^{すで}に昨^{きの}年^{とし}の洪水^{こうずい}小田^{おだ}畑^{はたけ}しりく流^{なが}せ竟^{つひ}に未^い進^{しん}滞^{ちゆう}り詮^{せん}方^{ほう}るく
して耻^はじらひかぐ一人^{ひとり}残^{のこ}りて妹^{いもうと}娘^{むすめ}と長^{なが}湯^ゆ下^{した}の関^{せき}へ遊^{あそ}女^{むすめ}に代^{しろ}わり
價^{あや}百^{ひゃく}金^{ごん}と懐^{ふち}中^{ちゆう}に今^{こん}朝^{あした}未^い明^{めい}に此^{こゝ}山^{さん}中^{ちゆう}あて盗^{ぬす}賊^{ぞく}に出^で會^あ金子^{ごんご}ハ勿^な論^{ろん}
希^{まれ}に衣^い類^{るい}迄^{いた}擲^なれりぬ取^とり全^{ぜん}金子^{ごんご}るてハ助^{すけ}命^{めい}るに况^{いかに}や
娘^{むすめ}の身^み乃^{すなは}ち代^{しろ}盗^{ぬす}取^とるに何^{なに}と面^{おも}て言^{こと}訣^{くわ}をこし某^{また}とてと元^{もと}
より此^{こゝ}土^{つち}民^{たみ}あてもゆりら雨^{あめ}刀^{やいば}と帶^{おび}せし者^{もの}の斯^{かく}零^ま落^{らく}の其^{その}上^{うへ}り
盗^{ぬす}賊^{ぞく}の為^{ため}に耻^はじらひれ怒^{いか}馬^ばに劣^せり老人^{らうじん}乃^{すなは}ち口^{くち}惜^{おし}み推^おし玉^{たま}
り此^{こゝ}上^{うへ}の御^ご慈^じ悲^ひに幸^{あき}便^{べん}もゆり愛^{あい}みく死^しせし為^{ため}に体^{てい}を宿^{やど}し
知^しらむ玉^{たま}のまきりして又^{また}身^みと翻^ひして飛^と入^いんとすことまゝと抱^{かか}止^ど
夫^{その}等^ら此^{こゝ}度^たよりゆり某^{また}思^{おも}ふ子^こ細^こも何^{なに}もバ死^しを止^どまり某^{また}か言^{こと}
と諾^なし玉^{たま}の色^{いろ}先^{まづ}是^{こゝ}と着^きしゆりし下^{した}り着^きし鴛^う鴦^{やう}指^さと

一編本質...
松太夫下着せし金百兩と取出し之を子細り聞し婦起
一方るぬ薄命去るが今差當る急難ハ百金だりわバ絶
命も及むぬよ則百金其許り恵む之然と之とも
未だ見も聞もせざる某り受王らん中もわろとされば爰
一箇の頼みゆられ今某地所よりかゝるに盜賊の所為と
見へ一人の老士と言し傍に此小児の打捨有しと見たり
忍びむを拾ひ上りて之を一人の山住養育の便り其許りの
小児と養玉りハ養育乃料として金子差を度り此爰許
諾玉りすやと言し松太夫大に悦び道と正しての御言葉
辞退致さんやうゆりば斯養育命むとも思ひ侍らばゆり
とも孝し身と賣娘の志爰死して其詮るけ去る故る

して金子借用致さんやうもなれし事と別ての御恵と夫婦食
と減じても養育致しと後印よりハ御姓名を明し
玉つこと之ども獵人がうく名乗ど某子細あり今暫く
明しがし久後ハるさより奉り合其時こそ名乗リナ
さん早くと歸らるりとして小児と松太夫の懐しして再び
後とも見むして別去バ松太夫ハ只其後形と伏拜ら涙と
共一人言して釐とて立歸り爰又丹波の國乃山奥
小年久し住居する闇雲鬼三治と號せ強盜りて近在
近郷ハ言不及り京大坂も誅廻して教多の悪棍と集へ
美婦と見色ハ妻室嬢屋のやむる拐撃歸りて慰物と或
ハ娼妓と賣て酒肉と替りて暴悪の澆賊るが此日も教多

の小賊と集一拐拳せし女共一酌とせ猪の股兔の臂種ら乃
 機肉と所せと追取散一三弦とかく鼠の土蔵茶碗と抑く
 鼻声乃鉢助食厨の破鍋々金海鼠と银杏の煮漆と出せり
 金銀のほし食とふ先のよみ糶理るりし褒美の詞り
 差出口乃瓶八が正月料理かたどと心得井鉢一抑牛房出り
 顔一差出と鬼三治忽ち気色と損トをえんの悪ひ抑牛房と
 鉢も取て打付何が機嫌と取直さんと勘定方の長助有
 合紙一さりと何書附差出と鬼三治是と取て見り○
 さ一足で比くみあせぬ秋津虫とらと祝せし手柄と大杯
 と差出ら又りや與と催して傍若無人の振舞之浩折しも門外小
 馬引と小賊とも打寄て泣入沖津と引立鬼三治が前小居りぬ

銘腕とつるぞ此頃希ふ嬋媚婦首領の褒美 須らんと
 つりめ解つと居りて鬼三治は是と見こに憂し沈
 ひ顔をせの芙蓉乃露とあめと沈魚落戸の美婦られ
 バ忽ち春心発し扱言りて我ハ此館の主鬼三治と名乗者
 かり汝今爰に来るを赤繩神の差図ありぬあなと人も
 るげ一戯る沖津熟し思へ中一野全斯とること成りハ
 とて存命身一つて去あても浦太良さても掌中此玉とも
 慈愛しものと獨山路に捨置て猪狼の餌と成るん逆も死と
 命るも親子諸とも死出三途と懐ふして行ん物とと詞と飾り
 いんかか不棟怎的人間の生涯ハ定りものと常言少も用て侍れハ
 君と分鏡のかさひるんも前世の因縁るれ推辞侍らんやうも



繪本管草紙卷三

なりこれと身と分一人の愛子つらつ捨て置る餓死せん事
の不便よりこれは一伴ひ玉りて其上にて何事も君の
仰し背たりと云ふ鬼三治莞尔笑てや其小児より近彼
ふ有んやあの子もかゝ思を思ふは中て我種と産せり
さうれ慕ひ玉ひとて混物戯を寄んとすと沖津も今忍
無つ隠し持し懐刀とすとりと抜てやと奸賊妻も武十太娘
さうぞ主人の御嗣我子の敵悪の及思ひまれとて夫と寄と事
せ左右の臂まらと握りか膳太と女も我と乃ら討んと
片腹りて去あが難面や猫思ひぞ増るれや女ども女
と誘引てよれ回答とせよとと舟へ行どと中と持
汝等と任とるに旬日の中小得心多く其時とを怨と晴

のどとて及び取突倒を成傍る教多の女沖津とて
一間へ入る鬼三治再び杯と廻し酒樽及びわを皆と卧ふ
入るけり却説沖津ハ教多乃女に誘をさるりす進む
つとど争う許諾べと今ハ一時も早く命と断る玉り
て一目と過りる小既る旬日と満てれが鬼三治り斯と
告るに大い執誇言て小嘆囉と叫出し這所と柵め翌日ハ
疾持り行て多分の價りせよと仰委し心と得りて手取足取
荒縄りて柵上外の方引行つ大樹の根と結付翌日ハ遊
妓と賣て得るせん今宵一夜木の下にゆれ夢と見よとて心
もかして内に入沖津心し思中りつるれハ斯浅同敷身とや
生る膝児と賣渡され生耻とさうさんようハ舌と噛て死ん

とし思ひつけく國不在を父母の恙なくおぼゆるるせめて全度
 詞をわさぶ罪の亡るよんがもつらめく思へどもつら又逢見ん
 支もかゝ糸乃結りきとけぬつらめ縄の肌喰入て衣と
 夜嵐に余寒惣身一切入て嘆き苦む其内は夜は初め
 と明ふればバけつや又つら成憂り逢ねんと思はれつを一思
 殺してよ死してよと泣声轟くして三人の小賊はこれ
 駕とつれりて来つ位入沖津と抱のせ足と早めて昇去る却説話
 春城友之助の夜と日小次で山路とたどり長刃さして心ざん鬼
 峠よりかり日も夕陽傾く心計の急とくとも志ぬ山路も
 夜も更て前後の道不見分秘漸一箇の地藏堂よりとり看
 今宵は爰に明さん物と堂内ふさぐり入暫く休息て居たりり

浩折しも谷間より三人の荒男一人ハ松明て二人ハ駕とく
 堂前より近付と友之助ハ身とむを何者うと窺居る斯とも
 三ハ三人の小賊暫く休息せん物と駕と傍よりおろし置一人
 のつらハ駕の内乃婢婦此中に賣渡さんよりハ幸ひ夜陰の
 山中るれハ先三人樂して後鬼も角もせんハ如何とつら残
 雨賊異口同音にとハ我等より言出んと思ひに逸速くと
 徐く先を取るとつら残念ると先女と是へ出せとつら駕の
 戸明て引出とつら沖津ハ縄目と働き得ば身とつらひけてよと
 泣と汝角せよ我斯せんると既りつらつらつら及ぶんと
 とつらと友之助見ると忍びと猿臂と延く雨賊と右と左と
 投退る残の一人驚れると休杖取て打つる初の二人もつら

物とも言ひ取てかゝると夏ともせむして三人とも遠の潭へを投捨り
 後の森とぞと音して一團の炮火友之助が袂とをれく沖津が
 肚腹打貫り仕損りりと彼曲者刀を抜て切て掛る友之助も
 被合せ二打三打切絶ぐと叶いとや思ひらん彼曲者ハ逃去り
 友之助ハ彼と追ど立帰て手負とりと先捆と切ほどは準備
 の金宝丹取出し地蔵り備へし一番の供水と以て口中にせり
 入まば沖津忽ち氣正しくかるといども痛手に身躰自由なり
 糸バ両の掌打合しつ苦さと思て言申う何方の相人ハ存しハ
 斯仁惠し預り侍るいと嬉しれ夏おひるれと御下しつて禮と
 かりと紙友之助是と止め大姐ハ何國の人ぬや言置夏のい
 り如何ふもして達し中さんハ忽ちに語りりつてとて禁と

抱て尋問し沖津のつてく斯深手と負ゆる上ハ生とさゆり
 侍る希く相入序つて傳へ玉とれり妻ハ元城筋乙訓郡
 山崎ハ高濱松太夫とや者の娘と幼より播磨赤松家ハ近臣
 井関十内殿ハ給事侍るに殿の寵り預りて孕りてと正室
 梶子五十掃左門と密り通し十内殿ハ毒茶服せ妻し思ひぬ
 濡衣と蒙りせゆ一人の奴僕と召連夜し約せり屋舗と出
 三國峠とて山賊ハ奴僕と害せりれ愛子と捨て妻ハ賊廓ハ伴
 ひ今かゝる所と及ぶやて始終の一五十一落もるく語り友之助一
 つ驚てその思ひがけざる事にあて某ハ同家中春城友之助と
 中者親出羽之助ハ其砌乃騒動し左門梶子の為り十内諸とも
 欺し討せ今斯零落し及ぶ敵左門梶子と尋ん為かり

とて其餘の一五一十是又落さるる語ふ沖津も一度ハ驚さ一度
 ハ嘆さ互の薄命と悲さ今斯君達希々せど巴妻が怨
 晴し湯で黄泉の鬼と成てんりのと爰り死する一人心
 かる雲る侍と懐中より守符と取出し後の印は是
 りて名乗合ひ玉りてと友之助渡り心易くおもつと
 り親同胞も有よりかねば名乗合て始終仔細し語傳へ
 中さん却身の敵も彼兩人より事起まり首尾よく敵討得せ
 其山賊も退治して黄泉の雲成晴し中さん快く成佛り
 とり声沖津も嬉し心ゆくみてつるあも朝の露とぞ
 消たり友之助望泪りれり斯く在へと支り
 袖有合杖して傍と穿ち沖津乃骸と取納り

大石と多のちとつ来り是と牌の石とかり佛名十遍計り
 唱へ衣服の塵と打り山又山成跡り見て長門の國と
 急ごり鶉鶴よく言へも飛鳥と離れ程よく言へ
 とも禽獸と放まごり左門梶子の筆り比まごり此兩
 人十内出羽之助乃兩士と殺害し其席より透電し若易お
 些のまごり有と以て彼所り趣と膝と入るりの黄土小屋
 とちる居成あむるとり何業の便着もふけを
 いぬお習覚へ一節截と敵く是とちりい編
 笠深く冠つ門にきて其日の糧お當ると思とも兩人
 食さ乏しければ今ハやいけ飢喝も及びるんとす
 智したる梶子るれば急らつたの方便とみして或日左門お



ひいて言やう蕪ての謀計半調ひ君し我と比翼乃契子ハ借
ふとととも豈計らんや斯浪る此身とあゝんとけ奪の衾を重
祢つとも命とけるぐの糧乏くてゑ樂と極めんによしぬ
らて妻思ふ子細らるる許諾玉らんやと言ふ邪智ふらん左門
るれば我とうとみ嫌ひく外身とせんとの事ありぬと怒
氣満面一涙を勅誇言て言て言て詞ハあり至るふ及ばど
今斯零落一及んぐ某とうとと汝一人身と立んとするや我
汝と遊妓一賣てそれと業の本錢とせんといれたるをわらと掘子
是と押しめらるる物狂ひ玉つる世と忍ぶ兩人争奪花の身
と入人や妻り思ふハ左門子細と語り其上あく鬼も
角も商議し侍らん何れ付ても世と忍ぶ身あゝるれど妻り此

黒髪とわ一切眉と延して男形お打扮医と業とせんと思ふ
こそととらに左門大い呆れおひもけぬ事を聞ひのうか
女の業るる縫針手習ふ更とあそ業ともせぬ医業せんなど
其意と得むと不審するに掘子呵囂々と打笑ひら女の身
とて巧くもぬる君の思はん程報然ハ侍もも佑便乃
為小侍まゝ氣疎も思ひ玉一々奪貯一々名香ハ人死をも
一度ハ蕪生さう切奇香かれば是とりて病と愈さんう
手とくごん追もる難病速く平愈せん更うごひあゝ去
かゝる此香と以て療とると聞てハ艸と打て蛇と驚くすの
憂もわれべそ妻弁と以て此謀のつらむと計ひらん
此更りも思ふらんと言ふ左門膝と丁と打奇成哉妙成る

會本實錄式卷之三

卧龍楠公乃りもものゝ大姫の才に及ぶん是れど妙策を
 より行ひてあて意恨をれ早くと準備をくく天も
 登る心地雀躍して喜びたるはおうく又みく死斯て
 用意全くと調ひぬともさんが其所てハ行ひがくや思ひ
 かん程りの方一軒の白屋と構へ花園亘と表札成出
 先試と速近と徘徊と其容躰長る黒髪と本短く切ほ
 是と項の方押し押るで長と羽織袴と着し朱鞘の両力
 を横へたる天稟美麗の女をれが齡さく四ツ五ツも若く威
 有るあをを猛りて天晴比類乃美男とあて見たりり
 或ハ道路り死とくは直も行て其辺て一燧の火を得
 是と病者の枕辺り置印篋より彼名香と少と取出

火中に炷て両の掌と等り口を呪と喃して猶鴉尾を接
 とひくく忽ち復生して死乃く見人聞人大り賞嘆
 一世にかる良医も在りぬ生瑠璃光佛とね此人と言
 るど風説たらず遠近お弘まり門前市成るといども我
 医業より日比信と奉る瑠璃光佛の夢中に秘誦と授
 玉へるとりてかゝる奇特のりなき本願と達せん為人を
 助くるのふまはあつて迎へるも湯をを行とせり風雨か
 仕玉ひとるをいふおそればらそ佛の再来るさゆり迎へ奉
 きく種々の珍宝奇品とりて賄賂さかぬお招ぬ
 日るべし金銀宮中お溢る名器席上り満るるれば
 仕裸せりて二人私と脱び身ふりて花美と冬

口へん珍味嘉肴不飽と栄耀し余り加之哀彦道の道にふけり
く教多の深皮と何れも動バ喧嘩し一人は疵傷是とてさうさ
金銀成以て財金減くるもとども揺錢樹とては憂とて
どさゆぐの悪行重るれば今ハ當國も悪説の沙汰も聞
ぬとバ又爰と立去て此野彼野し旅宿と求め以前乃じく
行ふ日づばしと大ふ行いとね忽ち福有の身と成れば
益最蕩のどを行ひて話分兩人爰に春城友之助ハ鬼ヶ峠
て沖津し行達驗動始終仔細ハ聞憤りつと増て一日も早く
本懐と達せんとの最期の古哥と心の哥占と長岳一立越
下の関ハ西國第一の渡會にそ三都ハ客らハ繁花の地るれば
とて此辺りに僅の白屋とあつてい昼夜遠近と俳佃し心を用

ひく尋るとどども何うの便かればはらぐに年月と送るつと
友之助の家宅の後ハ下の関第一の富家ハ妓楼ありて他は勝を
て遊妓多く其中にさうさ磯辺とては梅女今年二ハの月乃
顔又類ると美貌ハ誠り沈奥落戸閉月差花の美婦り
して殊に仮染の戯まて遊ハかたが和哥連誂お心と委
糸々我部屋ハさうさ前載の物好風流とて假山剝水
草樹中て一ツとしてユるればあは曲の冊垣ハ数株の赤紅
白色と交り枝折の外方にさうさ庭有て風雅ハ好し一居ハ
是か人友之助が閑居し庭境僅に茶垣のさうさ頃も秋の
初なれば草の露いと清げるに爰に磯辺ハ禿と持て那辺
那裏見巡り禿り持て筆とてさうさと認めると



友之助

毎話



置露や其色よりかぞへらと 打吟ら萩の枝に結ぶ折り
垣のあまるとに友之助心あくと女の口どきみくく垣を間
よりさうのぞくふいと美麗なる娼婦の短冊と結付て見て
○一うのをもとに咲かす萩と短句とほくろ成磯辺ハ驚と人
らうとあうでむらりおらう有つら誰人う聞せるま乃耻
しと去とてハハと心有げるる脇向うかと思ハ其主床しく
て枝折の間より半面より二十歳ぐりとおおし風流士の眼秀
顔色皎く清らかなる色郎されハ忽ち心とためさて見ぬ唐士の
崔宗之我朝の業平とて何奈此情郎ふ及ゾりのとと呆
然としてイハ友之助斯と見てハ空ありと心付て忽ち庵
ふ入りれば磯辺ハ後と打詠つ之趣部家へ帰るる是より

て友之助の面影の且夕忘る隙をてりハ斯と思ひ出と響
提の山より羊と経く空く朽や果るん人乃心を真比海にさ
磯辺一打浪小ゆれく舟のよる事もかかして唯々ぐりに月日
と送りらる今ハ思ひし絶垂てせめく心のさけてあうせまや
らて交細くと認持て築垣の絶間より覗見るに友之助ハ兎小角
敵の在所知がとと思悔て机に寄て露く絶おりちなれば
磯辺ハ是と熱く見てハ此君も余斯くや恋る人も有やとおの
思ひよりさうして早胸の火のりんとするをハ我るく浅間
しと胸と押しイハ思ひ余りての事感べりハ逆斯て止ると
て交取出し小石に結を机目當に擲入つ我部家うして立帰ぬ
友之助ハ斯とハあう何心く取上見るに封もせざる交るれ

心ろくばも閑と見るにるまかり詠し口すきみに添て悔し色糸此
 結と添し恋草と力車ふ七車積る思ひの数とあしてかつとも盤
 余野の千種乃花もけふ見て只一筋し思ひ寐の枕し通し泪の
 眉根かくさへいさづくに月日と送るるを露汁けられと思し
 玉りもかどいと切しふはちあつ扱無し○おりひ知るのくふりる
 ぐさゆん憂し心とくく玉章友之助讀終りて是ハ之通茂卿の
 讀哥小しと章とつひ手跡とつひ哥にすて心有公い床し死女りま
 とハ思るるも今かく放逸更志と寄る身しゆりひバ只ひとて
 打捨置るに磯辺ハ友の答とてなれなるをけり恋慕弥増く竟ふ
 病の床し卧ぬ去程し友之助ハけに月日と送るのそ少て敵の在野
 知ざれば坐して喰ハ山も空く成の諺漸好める画と書て僅の煙と立

るとくども今ハ中おひめ多くて折るいせあもこれれども猶色に
 言詫て當日とと過を内其年も末れ月し至りぬ色バ這回ら
 分説し言るくて中沈吟して居る折や一外の方ハ兩人の掛乞
 声高し詈りながつと入中にもハ木屋豆六とて人不知き強欲者
 巽上り此高調子しつとあ言ふ及むねども始る米と取木よ
 足蹴板ふ下と足りけ二年米買時ハ地藏顔掛取り来りや確
 柏子留主の間びりて間し合はたあ逢ハ間似合の嘘の八百八十
 女今請取よと杵親仁太らぐりして散動小節木ばりり色黒
 ち炭商人の薪屋お炭こうつひる友之助衿元取て引回し
 くれおびて去年此春花見戻りの道をがうア、よの男しやと
 見る内みちと氣のつくほらびし是幸ひと袖引て糸針出

して立ちあがり縫とあとの縁のより妻が心が届ひさう来て下らん
を更りやと肝あぬぐ書置さう其夜早速来さんして妻が心乃
嬉しさハ飛立中うに思ひ一故幸ひ辺る人もある何の御用と
袖引ハ新し炭と炭送まると胸のそらぐん折違ひ箕用さても
する事う妻が顔とよめくも譽らとためもよの違ひ呉服屋味
増屋紙筆やで残らば妻が取次で拂うて置さも何ゆぞ破て
つれどさくれく掛る薪の目で志せ思ひ余るくつそがいた片
思ひ一やと知とぬ送らぬ物と今更し可愛さ余つて憎さ
やう百倍さうして取柄を置ぬ後とも言ど今あこしやおあせおこ
しやと兩人が畳押く罵るふ両手とほりて友之助重くの御尤
今更詫るに言るくくども何卒今暫く御宥免るす下されう

一教る糸とも侍の斯手と合して詫奉るひらに御猶豫下と
色くいと拜巡ると豆六がとらとと蹴返し鞭くと打さうひひ
経廷らと士呼り誠武士の道と志ハ腹らさ切て死べさふ見苦
さ憂顔るを腰抜武士は似合ぬ両刀是と替らり取く呉ん
と兩人等しく立寄とらうとくく押止る死る程しゆハ斯見
苦敷御詫ハ不仕死し死まぬ子細もい夫し付ても此両刀猶更し
離しや鍋釜雜具ハ御勝手次第両刀をうりハ御用捨と詫る
も聞ぬ兩人が立寄袂と扣ゆる折節膝の辺りぞひたりや
落ると何ぞと取上見ると金百両賜友之助と記しぬハ誰人の
恵さかろとと不審さうふ兩人声と等くして是程金子と貯へ
みがるわけくといふ大盗人せひ拂りバ國守へ引どり行て憂

目と見せんほど来るべしと誓わふ出所あるごとく金子もあれども當
 下此難義是非なりと封押切てれり手渡しもれば二人の
 過言の難やゆらんといふも両手をつまみ叮嚀り禮とのづつ
 御用もつらば以後とも仰付られ下されしと如鼠逃てぞ帰
 ころし此百金は何人の恵もやその後の田と見て知るべし

繪本黃草紙卷之三終

